

96 明治12年1月3日 菊池長閑宛

□一号^(第カ) 明十二 一月三日 (長閑注記)

新年の祝愛度申上る第八号九号先月落手於波離婚并其身の片付方委細承知したり幸に今は過去の事となりたれハ夫に付年の初より彼は申上間敷出来る事なら総て忘れたきものなり追て本宿より書通あるへし私にハ必ず遠慮なく書送ならんと思てハ其上にて双方の意を酌分本宿へハ相応の挨拶致へし御祖母様存はあらせらるゝ中ハ別して両家の間角立ぬ様致度ものなり縦令私ハ当年中帰朝し兼る共帰た日にハ如何様□□添心致積りなれハ其旨阿波に通セラれ下されたし何か私迄通し度あらは秘事抔あるか又ハ格別の事なくとも手紙を送度けれハ英曆信方両君も在京故君等に頼□□容易に届へし然る時ハ何時も嬉く披見すへし十二月廿五日ハ邪蘇の誕生日にて諸人贈物を遣取する事丁度日本にて歳暮とて物を遣取するか如し親子兄弟中のミならず朋友の間にもあり今に残り居昔話に「サンタクロース」とて日本の大黒さまとも云ふへきものハ廿四日の晩に煙出より這入来て贈物を置往と云ふ事あり子供ハ^(抹消)親^(抹消)新き靴下を炉の側に釣して寝待するなり親か入置とハ知らず朝に起^(抹消)て^(抹消)色々の物か靴下に入あるを見て大喜をするなり私も友達より色々な物を貰返答に閉口セリ封入たる札ハ其□^(白カ)并当一日に到来し夫々の祝を述る印譬ハ

「のし御祝儀」と書か如し物に添^(虫喰)□□□□あり^(虫喰)の□^(虫喰)遣もあり
尊父君
武夫拜

(長閑注記)

「四月一日達シ

四月三十日此方第四号ヲ以テ返事」